

## 我々の作成した育児態度検査による研究 (2)

村 井 則 子

### はじめに

村井則子他(1989)は、従来の育児態度検査で採用されている warmth (愛情—拒否) と control (統制—自律) の2次元に対応する拒否的態度と統制的態度の2尺度だけではなく、神経症(質)傾向と外向性という2つのパーソナリティ次元尺度を合わせ持ち、4尺度40項目の育児態度検査である「育児についての質問紙」を開発した。そして、これまでに「育児についての質問紙」を標準化し、信頼性と妥当性の検討を行い、従来からのいわゆる養育態度と同時に親のパーソナリティを調べるのが育児態度検査としての有用性を増すことを示してきた(村井則子他, 1991, 1994)。

今回は、「育児についての質問紙」の使用可能性を母親以外の対象に広げる試みとして大学生に対して行った前回の調査報告において(村井則子, 1998)、紙数制限の関係で掲載できなかった補足調査(研究1)と幼稚園児の母親に対して行った調査(研究2)を取りあげて、我々の作成した育児態度検査の有効性を実証していきたい。

### 研究1. 子供が回答する自分の母親の育児態度と予期的育児態度

我々の作成した育児態度検査は、「自分が小さい時のお母さんになったつもりで」子供から見た母親について大学生に回答してもらう子供回答の質問紙として使用することが可能であり、また「6カ月の赤ちゃんの母親になったつもりで」大学生が回答する予期的育児態度検査としても使用可能であることがすでに実証されている(村井則子, 1998)。今回は、子供回答による自分の母親の育児態度と予期的育児態度の両方を2回の調査に分けて同一人で調べてみることにした。養護性の発達には「自分の親は自分をよく育ててくれた」という認知が大きく関係していることが指摘されているので(小嶋秀夫, 1991)、子供から見た母親の養育態度と青年である子供自身の予期的育児態度には強い関連性のあることが予想されるからである。

さらに、子供回答の育児態度検査とともに、「決まりや約束を守る子供であった」、「あまり親に頼ったりしない子供であった」、「多くの子供に比べて劣っていた」、「友達の間で人気者だった」、「努力をする子供だった」、「周りの人たちに親切な子供であった」の6項目に対しても回答を求めた。

愛情が強く(拒否的態度が弱く)しかも統制的態度が強いという親の権威型(authoritative)育児スタイルは、日本も含めて先進国社会で成功に導くとされる道具的能力ないしコンピテンスを

促進するとされている (Baumrind, 1978)。しかし、古くから Symonds (1939) の考えなどに基づいて、愛情と統制 (支配) がともに大きい過保護な母親の養育態度は、子供を依存的にするとされている (詫摩武俊, 1967)。その点を確かめてみようと思ったので「親に頼ったりしない子」という項目にも回答を求めた。

また、予期的育児態度検査と一緒に、「子供が好きですか」、「中学生以後赤ちゃんの世話をした経験がありますか」、「男 (女) に生まれて良かったと思いますか」、「将来自分の子供が欲しいと思いますか」、「将来良い親になれると思いますか」という親準備性と関係すると思われる5項目と「経済的必要性がなくても女性も働いた方が良くと思いますか」の合計6項目に回答を求めた。最後の項目は、母親志向意識が、女子青年の望むライフスタイルと関連していることが指摘されているので (青木まり, 1988)、予期的育児態度の発達と負の関係が予想されると考えて採用した。

## 方 法

被験者：大学生 176 人 (男 52 人, 女 124 人) である。

手続き：主として大学1年生を対象にした心理学の講義の後で、約1カ月の間隔を置いて、子供回答による自分の母親の育児態度と予期的育児態度を調査して、両方の回答がそろった資料を採用した。なお、育児態度検査の40項目およびそれぞれ6項目の関連質問項目は、すべて「はい」「?」「いいえ」の3件法で回答を求めた。

## 結 果

子供回答の母親育児態度と予期的育児態度の各4尺度得点の平均と標準偏差は表1のとおりである。統制的態度には差が見られないが、神経質傾向と拒否的態度は1%水準で、外向的傾向は5%水準で、いずれも予期的育児態度の方が子供から見た実際の母親の育児態度よりも高いこと

表1. 育児態度検査の4尺度の平均 (M) と標準偏差 (SD)

		子供回答母親の態度	予期的育児態度
神経質傾向	M	8.25**	11.14**
	SD	5.02	4.55
拒否的態度	M	9.70**	10.90**
	SD	4.76	4.90
外向的傾向	M	14.10*	14.73*
	SD	4.12	4.07
統制的態度	M	13.53	13.39
	SD	3.58	3.02

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

表2. 育児態度4尺度の相関 ( $r$ )

	今 回 $N=176$	育児態度再テスト $N=185$	予期的態度再テスト $N=132$
神経質傾向	0.44	0.74	0.76
拒否的態度	0.51	0.85	0.86
外向的傾向	0.55	0.69	0.67
統制的態度	0.48	0.75	0.68

表3. コンピテンス6項目への回答別の子供からみた母親の権威型育児スタイル得点と育児態度得点の平均と標準偏差 ( $SD$ )

		<i>N</i>	権威型スタイル		神経質傾向		拒否の態度		外向的傾向		統制的態度	
			平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>
規則守る	いいえ	24	150.83	86.84	8.71	5.66	11.42	5.16	15.29	4.47	13.46	3.80
	?	23	151.04	65.70	8.17	5.12	9.22	4.21	13.48	4.19	13.04	2.50
	はい	129	158.72	79.14	8.17	4.91	9.47	4.75	13.98	4.03	13.64	3.72
	全体	176	156.64	78.27	8.25	5.02	9.70	4.76	14.10	4.12	13.53	3.58
親頼らぬ	いいえ	97	154.66	78.07	8.54	5.28	9.56	4.52	14.47	3.89	13.77	3.65
	?	32	164.59	73.20	7.72	4.50	8.47	4.85	13.38	4.60	13.56	3.27
	はい	47	155.31	83.19	8.02	4.85	10.83	5.04	13.81	4.24	13.02	3.65
劣る子	はい	28	127.07*	68.94	10.00*	4.55	12.50**	4.06	12.29**	4.24	13.00	4.13
	?	44	146.07	61.88	8.91	4.23	9.32	4.69	13.27	3.76	13.52	3.56
	いいえ	104	169.08*	84.40	7.50*	5.32	9.11**	4.74	14.93**	4.04	13.68	3.45
人気者	いいえ	54	137.87	74.80	9.54	5.12	11.39**	4.38	13.20*	4.48	13.37	3.60
	?	85	163.84	74.45	7.52	4.78	8.99	4.71	13.98	3.92	13.40	3.43
	はい	37	167.51	88.54	8.05	5.16	8.86**	4.89	15.68*	3.65	14.08	3.92
努力する	いいえ	48	141.38	76.78	8.65	5.89	10.79	5.32	13.56	4.01	12.94	3.53
	?	22	131.36*	73.92	9.59	5.32	9.00	4.41	13.27	4.18	13.18	3.79
	はい	106	168.80*	78.03	7.79	4.48	9.35	4.53	14.51	4.14	13.88	3.55
親切な子	いいえ	20	138.00	76.17	9.25	4.73	11.85*	4.80	13.30	4.37	13.00	3.89
	?	55	150.45	76.22	7.95	4.97	8.80*	4.07	13.75	4.34	12.69*	3.47
	はい	101	163.70	79.63	8.22	5.12	9.76	5.00	14.45	3.95	14.10*	3.50

\*  $p < .05$       \*\*  $p < .01$ 

が示されている。

表2には、子供回答の母親育児態度と予期的育児態度との対応する4尺度の相関が示されているが、いずれも1%水準以上の有意な相関である。

表3は、母親の権威型育児スタイル得点の平均値を子供のコンピテンスに関係すると思われる6項目に対する3回答(はい ? いいえ)によって群分けして比較している。なお、権威型育児スタイル得点は、拒否的態度得点の逆を愛情得点と考えて、それに統制的態度得点を掛け合わせた

得点である。<sup>注1</sup>

権威型育児スタイル得点は、「多くの子供に比べて劣っていた」に「いいえ」群が「はい」群よりも高く、「努力する子であった」に「はい」群が「？」群よりも高いことがいずれも5%水準の差で示されている。母親の育児態度平均得点については、「多くの子供に比べて劣っていた」に「はい」群は、「いいえ」群よりも拒否的態度が高く、外向的傾向が低く、神経質傾向が高くなっている。そして「友達の間で人気者だった」に「はい」群は「いいえ」群よりも、拒否的態度得点が低く、外向的傾向が高い。また「周りの人たちに親切な子であった」に「いいえ」群は「？」群よりも拒否的態度の平均得点が高く、「はい」群は「？」群より統制的態度が高い。

表4は、親準備性と関連した5項目と「女性のライフスタイル」と関係した1項目への「はい」「？」「いいえ」回答別による3群それぞれに対する予期的育児態度の平均値と標準偏差を示している。「性の受容」への回答別の3群間には予期的育児態度得点平均に全然差は見られないが、それ以外の「子供好き」「赤ちゃんの世話経験あり」「将来自分の子供欲しい」「将来良い親になれる」の4項目に肯定的回答群は拒否的態度得点が低く、外向的傾向得点の高いことが示されている。ま

表4. 親準備性5項目と女性ライフスタイル1項目の計6項目への回答別の予期的育児態度得点の平均と標準偏差 (SD)

		N	神経質傾向		拒否的態度		外向的傾向		統制的態度	
			平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
子供好き	いいえ	19	11.58	5.17	15.00**	4.68	10.53**	5.19	13.26	3.45
	?	18	11.39	4.15	14.83	4.49	14.44	4.08	11.44*	2.71
	はい	139	11.04	4.54	9.83**	4.42	15.34**	3.55	13.65*	2.92
	全体	176	11.14	4.55	10.90	4.90	14.72	4.07	13.39	3.02
世話経験	いいえ	106	11.63	4.54	11.46*	4.71	14.11	4.44	13.19	3.27
	?	6	10.00	2.00	6.67*	3.98	12.50**	1.76	13.50	2.17
	はい	64	10.42	4.67	10.38	5.08	15.95**	3.19	13.70	2.64
性受容	いいえ	19	10.16	4.49	13.11	4.41	14.16	4.25	14.00	2.87
	?	17	13.23	4.45	11.53	4.09	14.29	4.01	12.47	2.32
	はい	140	11.01	4.55	10.53	4.99	14.86	4.07	13.41	3.10
子欲しい	いいえ	13	12.46	4.07	16.31**	2.98	12.46	5.22	12.77	3.56
	?	18	12.06	4.65	11.44	5.24	11.72**	5.09	14.28	2.82
	はい	145	10.90	4.57	10.35**	4.71	15.30**	3.58	13.33	2.99
良親可能	いいえ	34	12.35*	4.21	14.64**	4.19	12.29**	4.83	12.85*	3.46
	?	84	11.58	4.57	10.49	4.91	14.39	3.63	13.06	2.55
	はい	58	9.78*	4.45	9.31**	4.13	16.64**	3.25	14.17*	3.26
女性も働く	いいえ	29	10.24	5.76	9.07*	5.21	15.69	3.10	13.86	3.47
	?	42	11.29	3.54	10.19	5.04	14.93	3.25	13.33	2.97
	はい	105	11.32	4.55	11.70*	4.61	14.38	4.55	13.28	2.92

\*  $p < .05$

\*\*  $p < .01$



た、「良い親になれる」に「はい」群は「いいえ」群より予期的育児態度の神経質傾向得点が低く、統制的態度得点が高いこと、「子供好き」に「？」群は他の2群よりも統制的態度得点が低いことも示されている。なお、「女性も働いた方がよい」に肯定群は否定群よりも予期的育児態度の拒否的態度得点が高くなっている。

コンピテンスに関する6項目と親準備性に関係する5項目と女性のライフスタイル1項目の計12項目に対する「はい」「？」「いいえ」3回答の割合の男女差を $\chi^2$ 検定で調べた。「性の受容」と「女性も働く」に有意な違いが見られ、「性の受容」は女性で否定群の割合が高く( $\chi^2=9.97$ ,  $df=2$ ,  $p=.007$ ), 「女性も働く」では、女性の方が肯定群の割合が高くなっている( $\chi^2=16.46$ ,  $df=2$ ,  $p=.000$ )。また、「友達の間で人気者だった」に、回答する割合にも差が見られ( $\chi^2=7.74$ ,  $df=2$ ,  $p=.021$ ), 女子は男子よりも「？」群が多いものの、その他の項目には差は見られない。

## 考 察

表1から、統制的態度には差が見られないが、神経質傾向、拒否的態度、外向的傾向の平均得点には差が見られ、いずれも大学生の予期的育児態度は自分の母親育児態度よりも高くなっていることが分かる。子供から見た母親の育児態度は、現実の親の育児態度と言うよりも母親に対する子供からの願望が強く反映しており、予期的育児態度には予期不安が影響しているからであると思われる。

表2から、子供の見た母親の育児態度と予期的育児態度の相関( $r$ )は、神経質傾向が.44、拒否的態度が.51、外向的傾向が.55、統制的態度が.48で統計的に有意な相関である。しかし、非常に大きな相関とは言い難く、幼稚園児の母親の育児態度や予期的育児態度の再テスト信頼係数に比較すると明らかに低い。すなわち、同じ質問紙を2度繰り返した場合よりは低いが、中位の大きさの相関が示されているわけで、「子供から見た自分の母親の育児態度と予期的育児態度には関連性が強いだろう」という予想は、だいたい裏づけられていると思われる。

「母親の権威型育児スタイルは子どものコンピテンスの高さと関連するだろう」という予想について、表3によると、コンピテンスに関係する5項目のうち「多くの子供に比べて劣っていた」や「努力をする子供だった」への肯定的回答群と否定的回答群との間で、権威型育児得点に有意差が示され、他の3項目についても統計的に有意ではないが、予想と矛盾しない傾向が示されている。しかしながら、1.「多くの子供に比べて劣っていた」に「はい」群は、「いいえ」群よりも、母親の育児態度を外向的でなく、拒否的で神経質と見ていること、2.「友達の間で人気者だった」に「はい」群は「いいえ」群よりも、母親を拒否的態度でなく、外向的であると見ていること、3.「周りの人たちに親切な子であった」に「いいえ」群は「？」群よりも母親を拒否的態度が強いと見ていることなどが示されている。むしろ「子供から見た親の外向的傾向の高さと拒否的態度の低さの方が権威型育児スタイルよりも子供のコンピテンスと関連の強いこと」が示されている。育

児態度検査にパーソナリティ尺度を組み込んだことの有効性の一端がここに示唆されているように思われる。

なお、「愛情が強くて統制的である過保護な親の子供は、依存的になる」と言うことを確かめようとして、「親に頼ったりしない子であった」という項目を入れた。しかし「？」回答群の権威型育児スタイル得点は「はい」群や「いいえ」群よりも幾分高くなっているがハッキリした差は認められなかった。

表4は、「性の受容」を除いて他の4項目で肯定的回答群は、否定的回答群に比べて、拒否的育児態度が低く外向的傾向の高いことを示しているが、これは従来の結果と一致している（村井則子, 1998）。なお、「女性も働いた方がよい」に肯定群は否定群よりも拒否的態度得点が高くなっている。これは、幼稚園児の母親で、「男女平等主義的性役割得点の高さと拒否的育児態度得点の高さの相関が有意である」という研究2の結果と一貫性があると思われる。

## 研究2. 母親の感受性・共感性・主張性・性役割態度と育児態度

育児態度検査4尺度のうち、神経質傾向はアイゼンクの日本版MPIのN尺度と $r=.62$ , 外向的傾向はE尺度と $r=.60$ というように相関が高く、両尺度の妥当性が裏づけられていると考えられる。拒否的態度についても、MPIのL尺度と中位の逆相関 $(-.43)$ で、N尺度とも中位の相関 $(.34)$ である。また、健常児において、我が子の非定型サインをチェックする数が多い母親の拒否的態度が強いことや、幼稚園の保母によって「規則的で」「機嫌が良く」「気が散りにくく」「長続きする」と評定された気質の子供の母親は拒否的態度の弱いことが調査の結果見いだされているので、拒否的態度尺度についてもある程度妥当性が証明されていると思われる（村井則子他, 1991, 1994）。しかしながら、統制的態度については、MPIのどの尺度ともはっきりした相関が見られない。

これまでの我々の行った種々の調査から統制的態度について分かっていることは、1) 障害児の母親は、健常児の母親よりも統制的態度が弱い。2) 子供の気質について、幼稚園の保母が「かなり規則的」と評定した子供の母親は、統制的態度が強い。3) 幼稚園の保母と自分の子供の気質についての評定で完全不一致の多い母親は、統制的態度が強い。4) 統制的態度の強い母親の子供は、家族画で母親を大きく描くことである（足立智昭他, 1986; 村井則子他, 1991, 1994; 菊地由美, 1993）。

統制的態度の10項目を並べて挙げてみると、あまり他人に頼らずに自分で決めた計画にそってテキパキと几帳面に育児に励む母親像が浮かんでくる。<sup>注2</sup>

子供の養育者に対する愛着（attachment）研究では、例えば、母子の行動観察などから愛着が安定している乳児の母親は、不安定な乳児の母親よりも、食事や遊びの場面で一貫して子供に対して敏感で、協調的で受容的である（Egeland & Farber, 1984）。また、子供の誕生1年目に愛

着が評定された場合、安定した愛着を示す子どもの母親は、不安定な愛着の子供の母親にくらべて子供が1カ月と4カ月の時には子供に対してより敏感に反応し、9カ月にはより拒否的でないことが報告されている(Isabella, 1993)。したがって、養育者の感受性及共感性が母子の絆の大切な決め手であり、その後の子供の発達に影響すると思われる。

Baumrind の権威型育児スタイルは、受容的(拒否の態度が弱い)であると同時に支配的統制的なしつけであり、そのような母親の育児態度は子供の社会的知的な有能性と結びついている。それに対して、拒否的で統制的なだけの authoritarian (独裁型) 育児スタイルの母親の子供は、独立性や社会的コンピテンスも低いことが指摘されている(Baumrind, 1978)。我々のこれまでの調査の結果からも、統制的育児態度の強い母親は、子供の気質について保母と完全な不一致が多かったり、統制的態度得点が権威主義や形式主義の得点と相関していたりしているので(村井則子他, 1993), 「テキパキと几帳面できちんとした育児を実行している統制的態度の強い母親は、必ずしも共感性や感受性が強いとは言えないのではないか」と考えた。

Ray (1981) は、「主張性と独裁性は、ともに支配性の表現であるが、独裁性は社会的に望ましくないのに対して、主張性は社会的に価値のある態度の形式で、同じ支配性でも攻撃的な場合が独裁性で、ほとんどすべての攻撃性が省かれる(dispende)ような熟練した方法で表現されている場合に主張性と呼ぶ」としている。

従って、母親の一種の自己主張が子供に対する統制的育児態度として表現されているとも思われるので、「統制的態度の強い母親は主張性も高いだろう」と考えた。

養育性の発達そのものは男性にも同じようにあるとされているが(小嶋秀夫, 1988), 従来から日本では「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が強調されて、子供の養育は専ら女性である母親の役割とされてきた。しかし、最近では女性の伝統的性役割態度に変化が起こってきている(東 清和と鈴木敦子, 1991)。そこで母親の持つ性役割態度は育児態度や行動に影響を及ぼしている可能性が考えられるので、実際に育児にかかわっている母親の性役割態度と育児態度との関係を調べてみることにした。統制的態度は、権威主義的・形式主義的態度と相関していることや統制的態度尺度の具体的項目からくる「几帳面に育児に励む母親」というイメージから、「統制的態度の強い母親は、伝統的な性役割態度が強いだろう」と予測した。

## 方 法

被験者：仙台市の幼稚園児の母親 192 名である。

質問紙：1. 育児についての質問紙と、2. 共感性・感受性・自己主張性・性役割態度を測る質問紙を用いた。共感性は Davis の「情緒的共感性」尺度 7 項目、感受性は Lennox と Wolfe の「他者の表出行動に対する感受性」尺度 6 項目、自己主張性は Ray の「自己主張性」尺度 7 項目(Buss, 1986)を用いた。<sup>注3</sup>

性役割態度については「平等主義的性役割態度」短縮版スケールの17項目（鈴木敦子, 1994）を採用した。

手続き：2種の質問紙が入った封筒を用意し、幼稚園長にお願いして、受け持ちの保護者達を通じて園児達に手渡して、家に持ち帰らせてそれぞれの母親から回答を求めて回収してもらった。

回答は「まったくその通りだと思う」「よく当てはまる」に1, 「どちらとも言えない」に3, 「全然そう思わない」「全く当てはまらない」に5を記入する5段階で回答してもらった。

## 結 果

幼稚園児の母親192人が回答した育児態度検査の4尺度得点の平均値と標準偏差は、表5の通りである。

表6は、感受性・共感性・自己主張性・性役割態度と、子供の数・子供の性・下の子供の年齢・母親の年齢の平均値（ $M$ ）と標準偏差（ $SD$ ）を示している。<sup>※4</sup> 表6には、さらに統制的態度得点との相関（ $r$ ）と、統制的態度を従属変数とした重相関係数（ $R$ ）と標準回帰係数（ $\beta$ ）が示されている。

統制的態度と感受性や性役割態度や共感性とは有意な相関が見られる。また、重回帰分析で

表5. 育児態度尺度得点の平均値（ $M$ ）と標準偏差（ $SD$ ）

尺度	$M$	$SD$
神経質傾向	6.4	4.55
拒否的態度	13.6	4.15
外向的傾向	13.1	3.60
統制的傾向	12.3	3.90

表6. 統制的態度の重回帰分析の結果および各変数の平均値（ $M$ ）と標準偏差（ $SD$ ）

	$M$	$SD$	$r$	$\beta$
表出行動感受性	16.8	4.74	-0.39**	-0.37**
情緒的共感性	15.9	3.82	-0.16*	0.03
性役割態度	42.4	9.21	0.24*	0.19**
自己主張性	25.0	4.49	-0.02	0.01
子どもの数	2.3	0.68	0.10	-0.02
子どもの性	2.0	0.71	-0.04	-0.06
下の子の年齢	3.7	1.84	0.09	0.01
母の年齢	34.4	3.80	0.13	0.11
$R$				0.449**

\*  $p < .05$

\*\*  $p < .01$



表 7. 段階的重回帰分析の結果 (有意水準 5% 以上)

従属変数	投入段階	独立変数	$R$	$\Delta R^2$	$\beta$
統制的態度	1	感受性	0.39**	0.153	-0.36**
	2	性役割	0.43**	0.185	0.18**
外向的傾向	1	共感性	0.37**	0.135	-0.39**
	2	主張性	0.42**	0.176	-0.21**
拒否的態度	1	性役割	0.26**	0.067	-0.28**
	2	主張性	0.32**	0.103	-0.19*

\*  $p < 0.05$ ; \*\*  $p < 0.01$ 

表 8. 因子分析の結果

	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4	Factor 5
統制的態度	0.677	0.162	0.153	0.156	0.001
神経質傾向	0.194	0.821	-0.093	-0.096	0.019
拒否的態度	0.310	0.464	-0.678	-0.083	0.069
外向的傾向	0.402	-0.724	-0.051	-0.121	0.124
感受性	-0.779	0.068	0.005	-0.103	-0.094
共感性	-0.571	0.370	-0.222	0.065	0.218
性役割態度	0.324	0.120	0.756	-0.032	0.086
自己主張性	-0.245	-0.021	0.304	0.185	-0.695
母の年齢	0.052	0.031	-0.141	0.834	0.024
子の数	0.129	-0.047	0.177	0.718	-0.068
子の性	-0.165	-0.054	0.259	0.088	0.771

は、感受性と性役割態度の回帰係数および全体の重相関係数は 1% 水準で有意である。

表 7 は、表 6 の変数について一括ではなく統計的有意水準 5% で変数を選択する段階的重回帰分析をした結果を示している。統制的態度は感受性と性役割態度だけで重相関係数は  $R=0.43$  になり、分散の 18.5% が説明されることが示されている。また、外向的傾向は、共感性和自己主張性だけで重相関係数は 0.42 になり、分散の 17.6% が説明され、拒否的態度は、性役割態度と自己主張性だけで重相関係数は 0.32 になり、分散の 10.3% が説明されることが示されている。なお、神経質傾向については、有意水準 5% を満たす変数は見られなかったので段階的重回帰分析は行われなかった。

表 8 は、育児態度 4 変数と感受性・共感性・自己主張性・性役割態度の 4 変数に、子供の数・子供の性・母親の年齢を加えた 11 変数について因子分析を行い、ヴァリマックス回転後の結果が示してある。表 6 にある下の子供の年齢変数は母親の年齢と相関が高いので省いてある。

第 1 因子として、感受性と共感性和統制的態度に負荷した因子が抽出された。第 2 因子は、神経質傾向と外向的傾向のマイナスとに負荷した因子で、第 3 因子は、平等主義的性役割意識と拒否的態度のマイナスとに負荷した因子である。第 4 因子は、子供の数と母親の年齢に負荷してお

り、第5因子は、子供の性と自己主張性に負荷した因子である。

## 考 察

統制的態度尺度は、分散全体の18.5%だけではあるが、他者の表出行動に対する感受性と平等主義的ではない性役割態度によって説明されることが明らかにされた。

「統制的態度の強い母親は、感受性や共感性に偏りがあり、主張性が強く、伝統的な性役割態度を持っているのではないか」という予測は、平等主義的性役割態度には賛成しない傾向が見られる点についてだけ裏づけられたように思われる。感受性については、予想とは逆に、統制的態度の強い母親たちは「他者の表出行動に対する感受性が大きい」と少なくとも自分自身では思っているという結果が示されている。

今回の調査で感受性の尺度として使用したのは、他者の表出行動に対する感受性尺度で、他者の印象操作に対する認知能力を測定している。従って、母子の相互作用を観察することによって評定される「母親がもつ自分の子供の状態についての敏感な知覚や我が子の働きかけに対する応答性のよさ」とは必ずしも一致しない可能性も否定できない。少なくとも「他人の印象操作に対する認知能力が高いと報告する自信のある母親は、統制的育児態度が高い」ということはあり得ることとして納得がいくのではないかとと思われる。また、情緒的共感性との相関も示され、母親の統制的態度が強いと情緒的共感性が大きいと回答する傾向が出ている。しかし、共感性そのものは、感受性との相関が大きくて、重回帰分析での寄与は小さくなっている。情緒的共感性は、統制的態度尺度よりも外向的傾向の説明に大きく寄与している。

Davis (1983)によれば、共感的関心は社会的機能性や自尊心との関係はほとんどないが、情緒性や他者への利己的でない関心と関係している。従って、共感的関心が他者への関心と関係しているのであれば外向的傾向と相関していても不思議ではない。また情緒性と関係しているのであれば神経質傾向とも相関していてもよさそうであるが、相関は $r=.11$ であり有意ではないが逆に、神経質傾向が高いと共感性が低くなっている。神経質傾向がもつ情緒不安定な面は有効な人間関係能力の要因である共感性の高さとは相いれないことなのかも知れない。

自己主張性は、攻撃性をうまく除いた支配性であるということから、統制的態度との相関を予測したが両者の得点間に相関は全然見られなかった( $r=-.02$ )。対等な人間関係において上手に自己主張する能力は、自分の子供に対する支配性という形で発揮されるとは限らないのかも知れない。

自己主張性はむしろ外向的傾向と拒否的態度の説明に寄与していることが明らかにされている。自己主張性が弱くないことと外向的傾向の強いことが関係しているのは納得のいく傾向と思われる。

拒否的態度は、自己主張性よりもむしろ平等主義的性役割態度の寄与が大きく、平等主義的性

役割態度の強い母親は拒否的態度も強いことが示されている。

伝統的性役割分業が疑う余地のなかった時代には、女性は世間的に望ましいとされる母親役割をすることが当然であり、「自分は子供があまり好きでない」と正直に述べたり、「時には子育てに疲れてうんざりすることもある」など人間として当たり前な本音を公然と自由に口に出すことはもちろんのこと、自分の意識の中にそれを認めることも許されなかった。しかし、フェミニズムの影響で女性も子供や夫のためだけではなく自分自身を生きるという当然の権利に気づき、それとともに「される母性」の側からの願望や理想とは必ずしも一致しない「する母性」からの、つまり子育てをする立場からの、育児に伴う葛藤や複雑な心理についての研究に目が向けられ、一部の母親たちは、以前よりも率直に自分の心境を述べだしている(柏木恵子と高橋恵子, 1995)。

高学歴の女性には平等主義的性役割態度を持つものが多いという結果があり(鈴木敦子, 1987), また学歴の高い母親が子供に対する否定的態度の評定値が高いという結果も報告されている(大日向雅美, 1982)。つまり高学歴の母親には拒否的態度などネガティブな自分の心理状態にも気づく内省力のある人が多いせいではないかと思われる。また、拒否的態度はMPIのL尺度と逆相関していることから、平等主義的性役割態度の強い人は、あまり社会的望ましさを気にしないで率直に回答しているという事情もあるのかもしれない。従って、平等主義的性役割態度をもつ人が実際に母親として養育性が低い母性喪失者であると結論づけるのは早計であると思われる。

青木まり他(1986)は、子育てに対する否定的な意識が母親自身の年齢ではなく第1子の年齢により異なり、第1子が3歳から6歳の時、有意に高くなるとしている。今回の我々の調査では、拒否的態度と母親の年齢との相関は.002であるが、上の子の年齢との相関は-.082であるのに対して下の子の年齢との相関は-.118 ( $p=.108$ )であり、有意ではないが幼稚園児も含めて下の子の年齢が低いほど拒否的態度が高いという傾向が見られる。

因子分析の結果については、第1因子は統制的態度と感受性・共感性の強さの因子、第2因子は神経質傾向と内向性の因子、第3因子は性役割態度と拒否的態度(伝統的性役割態度と拒否的態度の弱さ)因子、第4因子は母親年齢と子供の数(母親年齢高いと子供多い)因子、第5因子は子供の性と自己主張性(女の子では母親の自己主張が強い)因子とそれぞれ解釈された。

第1因子において統制的態度と感受性や共感性との関連が大きいことは示されているが、外向的傾向(0.402)や平等主義ではない性役割態度(0.324)や自己主張性(-0.245)にも負荷が見られる。統制的態度は予測とは異なって、感受性や共感性との関連が大きく、性役割態度との関係はそれに次いで大きいことが示唆されている。テキパキと育児に励む有能感をもつ母親の特性が示されている。

第2因子は神経質傾向と外向的傾向の低さに大きく負荷しているが、拒否的態度(0.464)と共感性の低さ(0.370)にも負荷が見られる。神経質傾向と外向的傾向の逆相関については、MPIのN尺度とE尺度が逆相関していることと一致している。拒否的態度や共感性の低さも加わって明らかに第2因子は不適切な育児因子であると見なされる。従って、それとは対照的に、第1因子



や第3因子は適応的な育児因子と見なすことができるかも知れない。

第3因子において平等主義ではない性役割態度が拒否的ではない育児態度と関係していることが示されているが、自己主張性の低さ(0.304)と共感性の高さ(-0.222)にも負荷がみられ、伝統的な自己を抑えた母親の因子と考えられる。

第4因子における母親の年齢が高いと子供の数が多いという相関は、若い母親では上の子が幼稚園児でまだ下の子がいない場合を考えると当たり前である。

第5因子は母親の自己主張性と子供の性別に大きく負荷していて、共感性の低さにも(0.218)少し負荷している。母親の自己主張性は女の子だと強いというのは興味深い。

統制的態度は、自己主張性とは関連があまり見られず、感受性・共感性の強さや伝統的性役割態度と関係していることが示された。

我々が統制的態度の強い母親の感受性・共感性の強さに疑いをもった根拠は、我が子の気質についての評定で保母との完全な不一致が多いということと、権威的・形式的態度と相関しているということであった(村井則子と村井憲男, 1993)。前者については必ずしも保母の知覚の方が正確であるという保証はなく、また完全不一致は質問に対して「どちらでもない」とはしないで、はっきりと「はい」か「いいえ」で回答すると完全不一致数が多くなるので、統制的態度の強い母親は確信を持って回答しているからであるとも考えられる。統制的態度と権威的・形式的態度との相関についても統計的に有意なことではなく、両者ともに伝統的・保守的な態度という点で関連していた可能性が大きく、自信を持ってテキパキと育児に励む母親は感受性・共感性が強いと考えた方が自然なことなのかもしれない。

なお、外向的傾向は、共感性と自己主張性によって、拒否的態度は平等主義的性役割態度と自己主張性によってそれぞれ説明されることも示されたが、神経質傾向については段階的重回帰分析において有意水準5%を満たす変数は見られなかった。

## ま と め

我々の作成した育児態度検査の妥当性と有効性を検討する研究の一環として行われた2つの調査について報告した。

養育性の発達には「親が自分を良く育ててくれた」という認知が大きくかかわっているので、「子どもから見た自分の母親育児態度得点と子供自身の予期的育児態度得点とは相関するだろう」という予測のもとに、大学生を対象とした同一人における自分の母親育児態度と予期的育児態度の関係を調べた研究1では、両者に統計的に有意であるが中位の相関が見られた。また、子供のコンピテンスと母親育児態度の関係および親準備性と予期的育児態度の関係については、主として拒否的態度や外向的傾向が、コンピテンスや親準備性とかかわっていることが示された。

研究2では、「統制的育児態度の強い母親は、感受性・共感性・主張性が必ずしも高いとは言え



ず、伝統的な性役割意識を持っているだろう」と予想して、幼稚園児の母親を対象に母親の感受性・共感性・主張性・性役割態度と育児態度との関連を調べた。統制的態度の分散は、感受性と性役割態度によって18.5%が説明されるという結果が示され、性役割態度との関係のみが予想と一致した。その際外向的傾向は、共感性と自己主張性によって、分散の17.6%が説明されること示され、共感性と自己主張性は、統制的態度ではなくて外向的傾向と関係が深いことも分かった。

以上の結果を含めて、「育児についての質問紙」の妥当性に関しては、さらなる検討が必要なのは勿論であるが、今回行った2つの調査結果からも、我々の作成した育児態度検査の有効性と可能性の高さが示唆されているのではないと思われる。

注1.  $(20 - \text{拒否的態度得点}) \times \text{統制的態度得点} = \text{權威型育児スタイル得点}$

注2. 統制的態度の10項目: 1. きれい好きで、子供の食器やオムツなどの汚れがとても気になる方ですか。2. 子供の衣類の洗濯など、その日のうちにやらなければならないことを翌日までのばすことがありますか(逆転項目)。3. 子供の様子が、いつもと違うと非常に気になる方ですか。4. 子供をだれかに預けたりした時、どうなっているか気にかかる方ですか。5. 育児のことにについて周りの人から干渉されたくない方ですか。6. テキパキと子供の世話をしている方ですか。7. 子供は厳しくしつけるべきだと思いますか。8. できるだけ子供には規則正しい毎日を送らせるようにしていますか。9. たとえば、子供の食事や寝る時間など、決まったスケジュールをきちんと守らないと気がすまない方ですか。10. あまり気にかけずに、子供の世話を他人に任せることができる方ですか(逆転項目)。

注3. 共感性・感受性・主張性の尺度項目は、A.H. バス著大淵憲一監訳(1991)の「対人行動とパーソナリティ」(北大路書房)から採用した。

注4. 共感性・感受性・主張性・平等主義的性役割態度尺度ともに、「よく当てはまる」が1で「全く当てはまらない」が5として回答を集計したので、得点の低くなっている方が逆にその傾向は強いことになっている。従って、育児態度4尺度の得点が高いときに共感性・感受性・主張性も強い場合には相関がマイナスになる。子供の性は、男のみ1, 男と女両方2, 女のみ3とした。

## 引用文献

- 足立智昭, 村井則子, 村井憲男, 仁平義明(1986) 発達障害児をもつ母親の育児態度。日本心理学会第50回大会発表論文集, 517
- 青木まり, 松井 豊, 岩男寿美子(1986) 母性意識から見た母親の特徴—ライフ・ステージ, 自己評価, 充実感との関係から—。心理学研究, 57, 207-213.
- 青木まり(1988) 母子関係の前段階—女子青年における「母性準備性」。心理学評論, 31, 76-87.
- 東 清和, 鈴木敦子(1991) 性役割態度研究の展望。心理学研究, 62, 270-276.
- Baumrind, D. (1978) Parental disciplinary style on adolescent competence in children. *Youth & Society*, 9, 239-276.
- バス A.H., 大淵憲一監訳(1994) 「対人行動とパーソナリティ」。北大路書房 (Buss, A.H. (1986) *Social Behavior and Personality*. Lawrence Erlbaum.)
- Davis, M.H. (1983) Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.

- Egeland B. & Farber, E.A. (1984) Infant-mother attachment: Factors related to its development and changes over time. *Child Development*, **55**, 753-771.
- Isabella, R.A. (1993) Origins of attachment: Maternal interactive behavior across the first year. *Child Development*, **64**, 605-621.
- 柏木恵子, 高橋恵子 (1995) 「発達心理学とフェミニズム」。ミネルヴァ書房
- 菊地由美 (1993) 子どもの家族画と母親の育児態度について。東北福祉大学卒業論文
- 小嶋秀夫 (1988) 親となる心の準備。「母性」(繁多 進・大日向雅美編), 75-96. 新曜社
- 小嶋秀夫 (1991) 母となる過程の理解。「助産学講座3 母性の心理・社会学」(我妻 堯・前原澄子編) 80-111. 医学書院
- 村井則子, 村井憲男, 足立智昭, 仁平義明 (1989) 改訂版育児態度検査の作成。東北福祉大学紀要, **13**, 149-157.
- 村井則子, 村井憲男 (1991) 母親の育児態度と子どもの気質について。東北福祉大学紀要, **15**, 105-117.
- 村井則子, 村井憲男 (1993) 我々の作成した育児態度検査の妥当性の検討 (2)。東北心理学研究, **43**, 3.
- 村井則子, 村井憲男, 足立智昭, 仁平義明 (1994) 育児態度検査「育児についての質問紙」の信頼性と妥当性について。東北福祉大学研究紀要, **18**, 161-168.
- 村井則子 (1998) 我々の作成した育児態度検査による研究 (1)。東北福祉大学研究紀要, **23**, 151-164.
- 大日向雅美 (1982) 母性意識の発達変容について—母親の教育歴・就労形態・年齢別の分析—日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 298-299.
- Ray, J.J. (1981) Authoritarianism, dominance and assertiveness. *Journal of Personality Assessment*. **45**, 390-397.
- 鈴木敦子 (1987) フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討。社会心理学研究, **2**, 45-54.
- 鈴木敦子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール。「心理尺度ファイル」(堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊編) 358-362. 垣内出版。
- Symonds, P.M. (1939) *The Psychology of Parent-Child Relationships*. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc.
- 託摩武俊 (1967) 「性格はいかにつくられるか」岩波書店。